

釧路市立博物館 アイヌ文化展示 テーマ解説

「サコロベの人々」



目次

アイヌ民族	2
生業（狩猟採集・交易）	3
交通・運搬	4
衣装	5
装飾品	6
世界観	6
儀礼用具	7
嗜好・芸能	8
アイヌ・アート	10
参考文献	11

アイヌ民族

「アイヌ」とは、人間および男性を意味するアイヌ語です。北海道アイヌ、樺太アイヌ（サハリン・アイヌ）、千島アイヌ（クリル・アイヌ）の三つに歴史的・文化的に分かれ、北海道アイヌは、北海道全域と千島列島のうち南千島まで、樺太アイヌは樺太島南部、千島アイヌは北千島に住んでいたアイヌ民族とその子孫です。

日本列島、特に北海道を中心とした北方地域の先住民族であるアイヌは、近代以降、本州以南からの入植者が劇的に増加する中で少数者となり、生活のために必要な土地や資源のほか、主流社会の同化政策によって独自の文化が奪われてきました。戦後、アイヌ民族の指導者による民族復興運動が高まり、アイヌ民族の組織であるアイヌ協会の設立など、いくつかの成果を生みました。国際的な先住民族の権利認定などの影響も受け、日本国がアイヌ民族を日本の先住民族であると法律に明記したのは二〇一九年のことです。言葉や世界観などの独自文化の復興と保護だけでなく、差別的撤廃や社会・経済的格差の是正などが取り組むべき課題として残されています。

釧路地域は、歴史的に道東の中心都市であり、現在にいたるまでアイヌ人口の割合が高い地域の一つです。一八二二年の人別調査で、釧路場所のアイヌの人口は一三四四名と道内で三番目に多く、東蝦夷地（太平洋沿岸地域）では最多でした。釧路アイヌは、

屈斜路湖から太平洋に流れる釧路川流域に沿って集落を形成し、生活してきました。当館では、大正期から昭和初期に、主に釧路地域で収集したアイヌ資料を中心に展示しています。「サコロベの人々」というコーナー名にある「サコロベ」とは、アイヌ民族の口承文芸のジャンルの一つである「英雄叙事詩」のことです。

生業（狩猟採集・交易）

伝統的なアイヌ社会は基本的には狩猟採集社会であり、農耕や飼育は補助的におこないました。また、周辺社会との交易により手に入れる品々もありました。

狩猟には、ヒグマやシカなどの大型の動物を捕獲するため（仕掛け弓と毒矢、近代以降は猟銃も用いています。ウサギ、テン、鳥などの小さな動物を捕獲する際には、罠を用いました。展示している「中小動物捕獲器」は、害獣捕獲用の罠ですが、それぞれの生き物の特性に応じて工夫を凝らした仕掛け罠があります。

漁ろうには、伝統的には突き鉤や銚、罠、網、弓矢といっ



アマッポ（仕掛け弓）

た道具を用いています。そして、獲^とった魚の魂^{たましい}を神の国へ送るために、魚叩^{たた}き棒^{ぼう}またはなすち棒という木製の棒で魚の頭部を打ちます。サケ・マス類は最も多く獲れる重要な魚種であり、冬場に干^ほして翌年^{よく}の貯えにもします。

採集は、山菜や木の実、植物性のデンプンなどを、採れる季節に採取し、保存^{ほぞん}処理^{しより}をして年間を通して食事に用いることができるようにしました。

交易がアイヌ社会の発展^{はつてん}やアイヌ文化の醸成^{じょうせい}に大きな役割^{やくわり}を果たしてきたことは近年特に着目されていることです。隣^{とな}り合っている日本だけではなく、樺太や千島の他の北方^{しや}諸民族を通して大陸との交易を活発におこなっていたことが、資料調査や文献^{ぶんげん}調査から明らかにされています。

交通・運搬^{うんぱん}

山猟^{りよう}は獲物^{えもの}を見つけやすい冬におこなうため、カンジキは必需品^{ひつじゆひん}でした。冬は、アザラシやシカなどの毛皮を使った靴^{くつ}、夏場はサケ科の魚皮製の靴やブドウヅル（ヤマブドウ）などの植物で作る靴を用いました。身体を使った荷物^{こおい}の運搬^{はんぱん}道具には、荷負^{こおい}縄や子負具^{こおい}があります。これらは、編^はんで幅^{はば}



イタオマチブ（板綴舟）

広にした紐を前頭部に引ッ掛けて背中^せで背負^おうための道具です。

湖沼^{こしよなう}や川、海岸沿いの移動には丸木舟^{まるきぶね}、外洋への航海には、丸木舟の側面に穴^{あな}をあけて板^{いた}を何枚も重ね合わせて作る板綴舟^{いたとじぶね}を用いました。また、狩^かりでの獲物を運んだりする時には、即席^{そくせき}で作る木皮船も使用したといひます。

衣装^{いしやう}

古くは、魚皮、獸皮^{じゅう}、鳥羽、草皮や樹皮^{じゅひ}の纖維^{せんい}で作る自製の着物がメインでした。アットウシと総称^{しう}される樹皮や草皮纖維製の着物は、自家消費だけでなく、近世以降は輸出品としても多く生産しました。交易によつて、本州から木綿が多く手に入るようになると、木綿製の着物が増えました。着物には、アイヌ文様と呼ば^よばれる特徴的な文様を刺繡^{ししゅう}や切り伏せ^ふ（テープ状の細い布を文様状に縫^ぬい付ける技法）によつて施^ほします。また、交易で手に入れた小袖^{こそで}や陣羽織^{じんばおり}、蝦夷錦^{えぞにしき}なども、儀式の際に着用しました。



アットウシ（樹皮衣）

装飾品そうしよく

耳飾かざりや首飾りといった装飾品は、現在は儀礼ぎれいで女性の正装せいそうの一部として用います。耳飾りはかつて男性も身につけていましたが、これは明治期に政府によって禁じられた風習の一つです。男性の正装に伴う装飾品としては、幣冠へいかん、儀礼用太刀たちと刀掛帯かたなかけおび、タバコ入れ、陣羽織じんばおりなどがあります。女性の前掛けまか（炊事すいじなどに用いたもの）や針入れはり（裁縫道具さいほう）、男性の手甲てっこうと脚絆きやはん（かつては山獵りようにおいて用いられたもの）も現在は正装の一部として用いられることがあります。

世界観

アイヌは、この世界のあらゆるものに魂たましいが宿つていると考えます。そのなかでもカムイとして敬うやまつう存在そんざいがいます。アイヌに恵みめぐみを与えてくれる存在や、アイヌの力が及およばない存在がこれにあたり、物理的なモノだけでなく、自然現象や疫病えびきようなども含ふくみます。カムイのなかでも、山のカムイであるヒグマや、集落を守るカムイであるシマフクロウなどは、もっとも位の高いカムイと考えられています。カムイの本来もと的な姿すがたかたちは



タマサイ（首飾り）

アイヌ（人間）と同様ですが、アイヌの世界には、ふんそう 扮装をしてやって来ます。カムイたちはそれぞれの仮の姿でアイヌの世界にやって来て、その肉や毛皮など、アイヌにとって役立つものをもたしてくれます。そのお札にアイヌは、せいだい 盛大にかれらをもてなし、たくさんのお土産物を持たせて、カムイの世界へれい 霊を送る儀礼ぎらいをおこないます。もてなされたカムイたちは、カムイの世界に帰って仲間のカムイたちに受けたもてなしのことを伝え、またアイヌの世界へ仲間をともな 伴って戻もどって来るのです。

飼育した子グマや梟ふくろうなどに対する霊送りや、山獺りようによって得られた獲物えものの霊送りだけでなく、使用した道具に対して感謝するための器物の霊送りもおこなわれていました。カムイとアイヌとは、ごけい 互恵的な関係性を築いています。つまりカムイが一方的にアイヌに恩恵おんけいをもたらずのではなく、アイヌもまたカムイの喜ぶことをしてあげることです。カムイへの感謝の祈りいのは、霊送りの儀礼や先祖供養くようなどの特別な時だけでなく、日常的におこなわれるものです。

儀礼用具ぎらい

儀礼用具のうち、漆器しつき製品や金属製品は交易で手に入れた他製品ですが、アイヌ文化においてそれらは独自に受容され、内面化されていると言えます。例えば、アイヌ社会

においては、金属製のものは靈力があるものとして扱われませんが、刀だけでなく刀鏝も重要なもので、魔除けとして身につけたりもしました。

自製品（自分たちの手で作る道具）であるイクパスイ（捧酒匳）は、お酒を入れるお椀と高坏のセットと一緒に用いる道具で、その先端にお酒をつけ、祈り言葉を唱えながらお酒をカムイに捧げます。人間の祈り言葉の足りないところを補いながらそのメッセージをカムイに伝えてくれます。また、イナウ（木幣）とは、カムイに捧げられる贈り物です。

嗜好・芸能

江戸初期の十七世紀に日本に移入された煙草は、同時期にアイヌ社会にも伝わりました。アイヌ文化においては、嗜好品であるだけではなく、儀礼にも用いられます。アイヌ（人間）が好むものはカムイも好むと考え、一緒に享受しようと考えられています。煙草は、煙管とセットにして腰から下げて携行しました。タバコ入れには、木製のものや布製のもの、獣皮製のものなどが見られますが、煙管さしも含めて、その表面には精緻

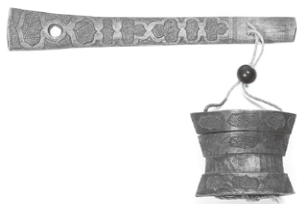


トウキ（杯）とイクパスイ（捧酒匳）

な文様が施ほどこされているものが多くあります。

アイヌ語でムツクリと呼ばよれる口琴こうきんという楽器は、世界各地で見られますが、素材は様々です。木片もくへんや骨ほね、金属といったものもありますが、現在のアイヌのムツクリはほとんどが竹製のものです。一人で演奏えんそうして楽しむ楽器ですが、かつては自分の想いを相手に伝えたり、その時の感情や自然のあらゆる音を一本のムツクリで表現したといえます。トンコリという五弦琴ごげんきんは、文献記録ぶんけんきろくでは、道北から樺太からふとにかけての使用が確認かくにんされています。戦後に北海道へ移住した樺太アイヌによって北海道に広く伝わり、現在はアイヌ音楽の代表的なものとして各地で製作され、演奏されています。太鼓たいこは、音楽として奏かなでることを楽しむというよりは、儀礼において用いられる、シャーマン（祈祷師きとうし・霊能力者れいりきや）の道具でした。

音楽として最もバリエーションが豊かなのは、口承文芸こうしやうぶんぎに含まれる神謡しんやう（節のついた物語）や、座り歌すわうた、労働歌などです。



タンパクオブ（煙草入れ）

アイヌ・アート

釧路地域では、阿寒湖^{あかん}や屈斜路湖^{くつしやろ}などの観光地で多くの工芸家たちが腕^{うで}を競い、これまでに数多くのアーティストを輩出^{はいしゅつ}してきました。アイヌ工芸のアートとしての確立は、観光業と切り離^{はな}せない関係にあります。元々は自家消費用の製品として用いられた民具は、工芸品として外部の文化圏^{けん}の人々から求められるようになります。近代以降^{こう}の道内の観光地^{もくちやう}での木彫^{もくちやう}や刺繍^{ししゅう}は、それぞれ多様な発展^{てん}を遂げ、アート作品としてその作り手や作品一点一点に高い価値^{かち}を見出されるようになりました。木彫や刺繍といった伝統工芸、古式舞踊^{ぶよう}などの伝統音楽だけでなく、多様な素材や手法によってアイヌ文化を表現するアートが日々生まれています。



床ヌブリ「カムイ・ミンタラ（神々の遊ぶ庭）」

参考文献

- ・（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構（二〇一六）『イカラカラーアイヌ刺繍の世界』（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構
- ・アイヌ文化保存対策協議会（一九六九）『アイヌ民族誌 上・下』第一法規出版株式会社
- ・アイヌ民族博物館編（二〇〇五）『西平ウメとトンコリ』アイヌ民族博物館
- ・北原モコットウナシ・蓑島栄紀 監修（二〇一八）『アイヌ—もつと知りたい！—くらしや歴史』岩崎書店
- ・中川裕（一九九七）『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー



釧路市立博物館アイヌ文化展示
テーマ解説「サコロベの人々」

執筆・編集 城石 梨奈（釧路市立博物館 学芸員）

発行 釧路市立博物館

〒〇八五―〇八二三 釧路市春湖台一―七

TEL 〇一五四―四一―五八〇九

発行日 二〇二二（令和三）年三月十日

印刷 株式会社 藤プリント

〈奥付写真〉マキリ（小刀）（収蔵番号 三三〇〇六）
〈表紙写真〉ヌササン（祭壇）（常設展示）

サコロベの人々

